

オブラスツォフ記念中央人形劇場

もう一か所だけ、モスクワに来たら訪れてみて欲しい場所をご紹介します。オブラスツォフ記念国立アカデミー中央人形劇場は、1931年に創立された歴史ある劇場で、自前で工房や博物館を有し、ロシアの数ある人形劇場の中で最も中心的



オブラスツォフ人形劇場のからくり時計

な役割を果たしています。日本では、この劇場は子ども向けとして紹介されることが多いため、ここまで戦争関連の話をして、なぜいきなりこんな劇場を紹介するのか?と思われるかもしれません。しかし、人形劇場イコール子ども向けというのは大きな先入観で、この劇場の出し物は、普遍的なテーマについて、大人が考えさせられる作品が多いのです。感情の整理がつかなくなったり、世の中や社会への疑問、やるせなさが蓄積した時、芸術が助けになることもあります。私の一押しの演目が、昨年秋からレパートリーに入った新作の「ファウスト」です。ゲーテの戯曲を元にした作品ではありますが、一般的なオペラとはストーリー展開が違ってきます。老博士ファウストではなく、悪魔メフェストフェレスが主人公です。彼は自分で「伝染病」を作り、人々を破滅に導きますが、そこに少年の姿をした神が戦いを挑みます。

内容の面白さに加え、人形の出来栄え、人形と人間の共演、連携が素晴らしく、音楽やダンスを多用しており、他の演目と違って一切セリフがありません。しかしセリフがなくても、完全に理解できます。まさにロシアの芸術の良いところ取りです。圧倒的な力に対抗できない無力感に襲われても、最後に一抹の光と希望を見出せる、まさに今のロシアだからこそ生み出されたであろう作品です。



「ファウスト」カーテンコール

投稿《旅行記》

北京で見た日本映画人大陸での足跡

菅原信夫 (SRC 湘南ロシア倶楽部・専務理事)

昨年、長春・満映撮影所跡博物館訪問を中心とした中国での日本映画人の活動を報告しましたが、本年2月春節見学がてら北京を訪問し、中国電影博物館で情報を得ましたので、日中映画史続編として旅行記を寄稿いたします。

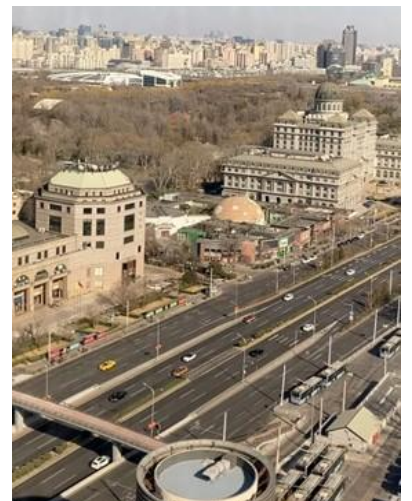


今年の中国旧正月(春節)は、中国政府による日本観光ポイコット指令から始まった。日本政府速報値によると、今年1月の中国からの入国者は385,000人で昨年同月の60%減とされている。この状態が春節終了(2月17日～3月3日)まで続く予想される。

この時期に北京訪問を企画したのは、私の中国語教師が一時帰国をするので同行できるという理由以外に、空港、ホテルをはじめとした観光施設が空いているという期待があったからだ。

事実、北京首都空港はまさにガラガラ、この様子には息を飲んだ。空港から一路市内のホテルへ。今回利用したのは北京新世紀飯店。日本人訪中者がピークを迎えた2010年頃にはJALホテルズの一つとして日航飯店なる名前で営業していたホテルだ。今回到着した17日は、客はまばらだったが、翌18日からは地方からの団体客が大挙到着し大変な混雑状態になった。

右の写真はホテル28階の部屋から北京動物園方面を写したものの。幹線道路を走る車の数が少ない。大気汚染(PM2.5)が大問題になった北京だが、この日から帰国まで快晴の天気とPM2.5の減った大気のおかげで、滞在は快適であった。



下の写真は北京新世紀飯店の入り口にある春節ディスプレイ。2019年、同じ春節の時期、私は上海で宿泊したホテルの巨大ディスプレイの豪華絢爛ぶりに度肝を抜かしたが、今回のホテルではあまりの質素さに驚いてしまった。中国経済に詳しい知人によると、



この現象の根本にあるのは中国経済の低迷。今年には記録的な90億回の移動(春運)があると言われる春節だが、実際それほど感じないのはコストのかかる海外

や大都市を観光する地方人口が少ないためとのこと。おかげで大変快適な北京滞在ができたことが最大の収穫だった。

我々のツアーでは、グルメ体験も大きな目的の一つである。

今回の短い滞在では、①湖南料理 ②北京料理 ③B級グルメ(ジャージャー麺、火鍋)④ロシア料理 をそれぞれの分野での有名店で料理を楽しんだ。

今回のベストは①湖南料理。毛沢東をはじめとして中国共産党歴代の指導者を産んだ土地、湖南地方。その料理は距離的にも近い四川料理や広東料理にも似た辛さのきいたしっかりした味の中にも独特の香り(燻製、山椒)があって、口を清めてくれる。一口で言って品の良さで調理の丁寧さが光る料理であった。

甘さは全くなく、弱い塩味のみで、ロシア料理の「サーラの燻製」とほぼ同じ味。ロシアではウオッカ、中国では白酒のおとも。

豚の角煮

中華料理では浙江省の東坡肉が有名だが、これは長崎で食べたロフテーに似て、優雅に多種のスパイスを使用した素晴らしい作品だった。



豚脂身の燻製

中国電影博物館を訪ねて

今回の北京訪問最大のテーマは「中国電影博物館」を訪問し、開催中の「中国映画誕生 120 周年特別展」を見ることだった。

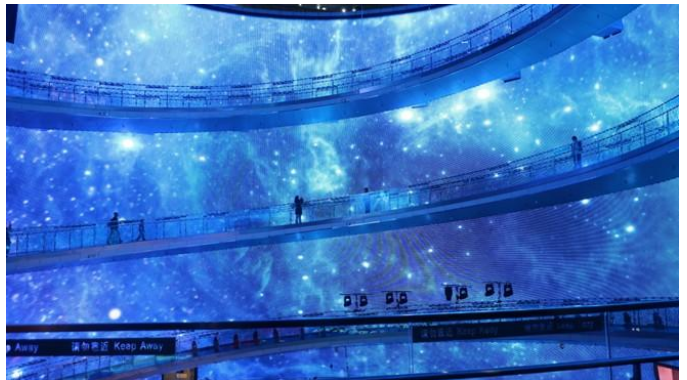
中国電影博物館とは、中国映画誕生 100 周年(2005 年)を記念して、国家広電総局と北京市政府が建設した映画専門の博物館で、2007 年に開館した。フロアは 4 階まであり、1 階の映画館、2 階の芸術展覧区、3 階の企画展フロア、4 階の電影技術博覧区に別れている。2 階では 1905 年に撮影された中国初の作品「定軍山」の撮影風景をモックアップで見せるなど、この博物館でしか



見られない貴重な資料を展示している。

いや、とにかく巨大な博物館である。敷地面積 26ha(東京ドーム 5.6 個分)建物面積 38,000M2 という規模。その建物内部には 1 階から 3 階までを突き抜ける巨大 360° スクリーンがあって、全天周画像を上映している。訪問した時には春節にまつわる馬が世界を駆け巡る素晴らしい画像だった。

観客は 1 階フロアに座ってみてもよし、1 階から 3 階まで繋がる螺旋階段の好きな場所で見られることもできる。さらに特筆すべきはフロアにもプロジェクトマッピングのように輪郭のはっきりした映像を投射することができ、観衆は瞬間的に別世界にワープしたような錯覚を体感する。



さらに映画館には 6 つのスクリーンがあり、その一つには中国最大の IMAX 設備が導入されている。その収容人員は 1000 人とのことで、これも多分世界最大級だろう。

1 日ではとてもこの博物館の全てを体験することはできない。北京旅行をされる際にはイチオシ施設である。

電影博物館での発見

昨年のレポートでは、1930 年代日本が関係する中国の撮影所として①満映長春撮影所(甘粕正彦-満鉄-日本陸軍)②中華電影(川喜多長政-中国民族資本-日本海軍)の二つに焦点を当てた。そして、満映の日本人映画技術者たちが日中戦争終結後、長春や他地域の映画撮影所に引き続き勤務し、中国映画の制作に携わったことを報告した。

今回北京では、これらの撮影所や日本人映画技師たちに関するより詳しい情報を知ることができた。

・日本側資料において知った事実:

日中戦争終了後、中国共産党に接收された満映長春撮影所では満映勤務の一部日本人がそのまま残り、後を引き継いだ東

北電影製片廠(略称:東影)で重要な仕事に就いたことが、中国側資料でも証明された。氏名と職務が明確になったことも思いがけない発見であった。

序号	日文名	中文名	专业	工 作
1.	内田吐梦		导演	协助审片, 提供咨询意见等
2.	木村庄十二		导演	协助审片, 提供咨询意见等
3.	八木宽		编剧	《民主东北》
4.	仁宝芳男		技术	生产再生胶片
5.	秋山喜世志		技术	生产再生胶片
6.	大岛顺二		技术	缩制 16 毫米胶片
7.	持永只仁	方明	导演	《皇帝梦》、《瓮中捉鳖》、《谢谢小花猫》、《小铁柱》、《小猫钓鱼》、《采蘑菇》
8.	福島宏	傅宏	摄影	《民主东北》、《光芒万丈》、《无形的战线》、《红旗歌》、《人民的战士》、《鬼话》、《草原上的人们》
9.	岸 宽身	杜榆	摄影	《民主东北》、《桥》、《内蒙人民的胜利》、《六号门》
10.	气贺靖吾	贺靖	摄影	《民主东北》、《赵一曼》、《光荣人家》、《卫家保国》、《钢铁战士》、《刘胡兰》
11.	岸 富美子	安芙美	剪辑	《民主东北》、《桥》、《光芒万丈》、《无形的战线》、《红旗歌》、《刘胡兰》、《辽远的乡村》、《内蒙人民的胜利》、《白毛女》、《六

スライド資料には次のような説明があった。「『東影』の設立および創作・制作の過程では専門スタッフが非常に不足していました。かつて『満映』で勤務していた数十名の日本人スタッフが『東影』の設立・運営に参加し、創作・制作において重要な貢献を果たしました。」

・日本人技術者名簿に記載されている岸富美子氏は「満映秘史」という本を上梓されている映画編集のプロである。ただ、中国共産党のもとで働いた日本人技術者の名前を明示することが本人たちにとりマイナスになることもありうるとして、同書には日本人氏名は書かれていない。私はこの展示で初めてその氏名を知った。

・岸氏は博物館についてこんな記述をしている。「平成 17 年、中国は国の威信をかけて、世界最大規模の映画博物館「中国電影博物館」を北京市郊外に開館、館内の一角には旧満映の日本人技術者の業績を称えるコーナーが設けられた。技術指導を受けた中国の映画人たちが、旧満映の日本人社員たちの貢献を顕彰するべきだと強く訴えて設置が実現したという。(岸は)このオープニングに招かれ、東影作品「白毛女」の真の編集者であると博物館館長から中国メディア、映画人に紹介された。」

・旧満映社員は中国側の撮影所で 8-10 年もの期間勤務をして、その後日本に帰国している。その後も頻繁に中国訪問を行い、時には周恩来を表敬できる立場で中国と日本を繋いだという。日本のマスコミではほとんど報道されない日中関係の深部での出来事である。岸氏ら日本人旧満映社員が新東影で制作した映画は、主に中国共産党の PR 映画と言われている。このため、帰国後も自分の関わった映画についてはほとんど無言を貫いた。

作品にはエンドロールに編集者として岸氏の名前が登場するが、安芙美という中国名のため、これが岸氏であることが判明するのは



博物館の日本人技術者コーナーのパネルの前でかなり後年のことであった。

日中関係の雪解けと共に 1960 年代には映画人による日中交流が再開されたことがパネルに貼られた写真からわかる。

…(略)…

あとがき

DF(一般社団法人ディレクトフォース国際研究ユニット)には大陸生まれの会員もおられるくらい、過去日本と中国の距離は物理的にも心理的にも近かった。そう考えると、現在ほど日中間に距離のある時代はないのではないのか。日中戦争終戦後も中国に残り、中国映画発展に尽くした日本人を今回の中国電影博物館で偲ぶことができたが、隣接する中国鉄道博物館では、やはり終戦後中国に残り、鉄道の維持に努めた千人単位の日本人一主に満鉄勤務者一がいたことも知った。ともに中国政府がそれら日本人を顕彰しているので明確な形で知ることができた。

一方、日中交流における中国の日本への貢献が今忘れ去られているように見えて仕方がない。最大の貢献者は満州残留孤児問題での養父母だろう。かつて「大地の子」という山崎豊子の小説をNHKがドラマ化し 1995 年に放映したことがあったが、以来満州に興味を持つことになった私は、日本の貢献とともに中国の貢献を忘れてはならないと思い続けている。現在、政治的に日本を中国からいかに切り離すか、という切ない努力が続けられているように見える。

私が書道で臨書する作品は全て中国詩歌である。せめて、漢字を通してだけでも、日中の交流の歴史に関心を持つ一人の日本人でありたいと思っている。

菅原 信夫(一般社団法人 SRC 湘南ロシア倶楽部・専務理事／一般社団法人ディレクトフォース国際研究ユニット・代表幹事)

※本記事は、菅原信夫さんが一般社団法人ディレクトフォースの会報に書かれた報告記を、一部抜粋して掲載させていただきました。